「人生の土台」　2026 年 10 月 25 日

コリントⅠ　3:10～17

本日の礼拝後は、お知らせしていたように教会建築や会堂のメンテナンスに関しての講演会を持たせて頂きます。先日の雨漏りが発端となり、この際、専門家の方から今後どのようにこの会堂を維持していったら良いのかということをお聞きします。目にみえる部分での会堂の建物について、今後、私たちが為すべきことを教えて頂きます。この礼拝おいては、目にみえない部分の教会建築について目を向けて参ります。

イエス・キリストという土台の上にどのように上げてゆくのか

この手紙を記したパウロは、教会の建物について譬えで語っています。ここで一つ抑えておきたいポイントがあります。教会とは、建物そのものの建築物である教会堂の事を指すのではなく、イエス・キリストによる神の救いの恵みに与り、神の民として生きる者の群の事をいいます。イエス・キリストを土台としてここに集う一人一人の信仰者の共同体が教会です。その群れに連なっている私たちが、真に神の民として歩むための事が考えられています。

10-11 節では、イエス・キリストという据えられた土台の上にどんな家を建てるかは、私たちの信仰に委ねられているのです。それぞれ、教会の部分としての働きとして、私たちはそれぞれが建築家であります。但し、どのように建てるか注意すべきだといいます。「イエス・キリスト」という土台を無視して、だれもほかの土台を据えることはできないと。イエス・キリストという土台とは、「十字架につけられたキリスト」のことで、道徳的に何か善い事をするとか、思いやるとか、そのようなこの世的なレベルではなく、イエス・キリストが十字架に架かって死んでくださった事によって、神が赦してくださいました。教会の土台はそのイエス・キリストであって、誰もイエス・キリスト以外に土台を据えることはできないと断言しています。言い換えるならば、教会はこの世の権力や人間の能力や人間の力では土台を据えることはできないということです。

更に 12-15 節では、「この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、わらで家を建てる場合、おのおのの仕事は明るみに出されます。かの日にそれは明らかにされるのです。なぜなら、かの日が火と共に現れ、その火はおのおのの仕事がどんなものであるかを吟味するからです。だれかがその土台の上に建てた仕事が残れば、その人は報いを受けますが、燃え尽きてしまえば、損害を受けます。ただ、その人は、火の中をくぐり抜けて来た者のように、救われます」

この譬えは、建築に用いる素材のこととして語られています。それは私たち教会に集う私たち一人ひとりのことです。「金、銀、宝石」と「木、草、わら」の二通りがあって、その違いは、残るものか、或いは燃え尽きてしまうものであるといいます。やがて終わりの時、神の審きに耐えられものか、耐えられないものか、という事で、それは素材によって決定する、つまり私たちの信仰によって決定するというのです。神の御心に適わないならば、木や草やわらのようなもので燃え尽きてしまうのです。私たちは何を大事にして、何をもって教会を形作ろうとしているのか。残るものか、燃え尽きてしまうものか、私たちはそのことを、絶えず問い直す必要があるという訳です。

私たちの人生においてもいえることです。人の目に立派で人に評価されるものが、神の審きに耐えられるとは限らないということです。社会の片隅で誰にも評価されない人生であったとしても、神

を信じ、御言葉によって導かれた人生を送った人がむしろ、神の目に尊くやがての時には残るものとなるということです。神は人間の常識や感覚に捕われるのではなく、終わりの日の神の吟味に耐えられる素材を求めておられます。どのような信仰生活しているかという事が問われています。

神の神殿である私たち

続いて 16-17 節 「あなたがたは、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住んでいることを知らないのですか。神の神殿を壊す者がいれば、神はその人を滅ぼされるでしょう。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたはその神殿なのです」先ほどから私たちの信仰はどうであるか、ずっと心探られているようで責任重大のようなプレッシャーを感じてしまうものです。しかし、そうではなさそうです。

私たちがイエス・キリストの十字架によって罪を赦された者として形作る教会に神の霊＝聖霊が宿っておられ、そのように私たちを神のものとされ、そこにこそ喜びがあるのです。教会を形づくる私たち一人一人のこの体が、神の神殿とされ、神の霊が宿ってくださる。そこにこそ私たちの喜びがあるのです。「知らないのですか」とパウロは言います。私たちは知らなくてはなりません。私たちは神の神殿であり、神の霊が私たちの内に住んでおられるのです。それほどまでに教会は、またそこに集う私たちは神にとって特別な大切なものだということです。私たちは、単なる人間の集まりのように教会に存在しているのではなく。自分たちが神の神殿とされていることに対する畏れと感謝を忘れてはならないのです。神の神殿とされている私たちは喜びがあるのです。イエス・キリストという確固たる土台にしっかりと立ち、自分の人生を、そして教会を建て上げていきたいものです。